紀要創刊に際して

森　　國太郎※

この機会をかりて私なりの体育理論の問題点を述べてみたい。

1．生産活動に直接導入されない人間の諸能力を、いかに評価すべきかであり、自由時間（レジャー・タイム）における活動のための教育に、正当な地位を与える理論をはっきり確立すべきである。現在自由時間のための教育は課外活動の名のもとに行われているが、これは正課の時間外の卒業には無関係の、学生又は生徒の自由意志のもとに行われている。生産活動から解放された老人達の生活をみれば、果してこれでよいのかが気になるのである。この自由時間の教育を考える場合、次の事項を考慮すべきだと考えている。

① 人間にとって遊びとは。
② 資源有限論、南北問題等から、大量生産、大量消費が反省されている折、富の概念考え直してみる。真に人間にとって富とは物の所有ではないのではないだろうか。
③ 情報生産における一級の人々（一流選手のように国家的、民族的偉業として報道されるような人々）と同種のレジャー活動をしても、自己の記録のわずかの更新に終った人々にも個人的には同様の情報生産としての生きがいとして感ぜられるような価値論。
④ ライフ・ワークを得させる教育の必要性。
⑤ 東洋的世界観（特に佛教的）の重要性、身心一如の理想の実現が終生の修業につながり、自然としての身体から自然界にとけこむ事をも理想とする東洋的世界観のみなおしの必要性。
⑥ 商業主義とレジャー・タイム。
⑦ 真の生きがいとは？。

以上の事項が論点になるだろうと考えている。特に以上、7項目は、学際的な問題であることは確かである。自分の専門以外のことは論じないでは、学生に納得いく講義はまさに不可能である。

2．スポーツの効用（攻撃と協調）。

スポーツの役割としては社会的役割、個人的役割、集団的役割に分けられるだろう。ローレンツはその著書〝攻撃〟の中で、動物における種内攻撃の儀式化されたものとして高い地位を与えている。人間が自分の本能的闘争反応を意識的に責任をもって制御するように人間を教育する点は比類ない重要な役割だとしている。個人主義的な社会になりつつある現在、我々はこの点をもっと分析して前面に出す教育も必要である。又、彼はスポーツには超個人的な社会集団の間ではほんとうの熱狂をともなう競争ができ、集団的な特殊な形での攻撃性までも完全に阻止してしまう事ができると、暗に戦争防止の役割を説いている。攻撃と協調の問題は、長い間、研究されてきたが、今後も続けなければならないスポーツの特性の一つであろう。

3．身体論。

身体に対する観方の西洋と東洋の違い。身体の活性化と頭脳の活性化の関係。人間の進化における身体と脳発達の関係。脳と身体は互に発達を助け合っている云々。身体外遺伝としての文化遺産を多く所有する人種とそうでない人種の間に真に生きてゆく能力に差があるか？と云う問題（サバイバル能力）。身心相関の問題……等我々が直接研究しないまでも、関心を持ち、その分野の学問的研究に熱い眼差を常に送らねばならないだろう。

4．大脳の新皮質（前頭系連合野を含む）以外の脳即ち、大脳辺縁系、脳幹脊髄系の教育（鍛練）をいかにすべきか。これも知育以外の領域である体育と関係があると想われる。

① 意識の本源一意欲となるメカニズム。
② 集団欲、怒り（攻撃）恐れのメカニズム。
③ 殺し屋にもなる創造性の脳の制御としての真の親しみとしての集団欲（スキンシ

※愛知大学

ップ）の強化の問題。

これらが大脳生理学的に考えられる問題であろう。

以上手さぐりの状態で、他の分野関連を保ちながら体育理論を展開して来ている。こんな大きな領域では真に自分だけの領域の研究は無理であろうが、これも一つの研究のあり方と考えている。

説明を略した点御容赦願いたい。

参考文献

1、人類最後の教育（森　龍太郎）文教書院 1974年。
2．身体（湯浅泰雄）創文社、1977年。
3．攻撃1・2（Konrad Lorenz）（日高敏隆・久保和彦訳）みすず書房、1970年。
4．生物と哲学との間（飯島　衛）みすず書房、1969年。
5．成長の限界（ローマ・クラブ）ダイヤモンド社、1975年。
6．展望（雑誌）1972年、8月号。
余暇の思想（安永寿延）。
7．人間であること（時実利彦）岩波新書。
8．人間の分子像（大木幸介）紀伊國屋新書。
9．その他の参考文献も考え方として利用させていただいた。